

俺と天然水。

ハク真

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

捻デレぼっちな先輩、比企谷八幡

あざとい1年生徒会長 一色いろは

交わるはずのないふたりの運命の糸は徐々に交わりはじめて……？

目次

俺と後輩。	1
俺と昼休み。	4
俺と放課後。	8
俺とデート。	12
俺と帰り道。	17

俺と後輩。

「せんばい。やばいです、やばいんですう〜」

先輩、それは学問、年齢、地位などか上の人や、また同じ学校、会社などに先に入つた人を指すことばである。そう、この大義を見ればひとりの人間に対して先輩と呼ばれる人は多数存在することになり、別に俺を指す言葉ではないだろう。

「せんばい！せんばいってば！聞いてますか？……えいっ！」

「つぐえ！」

なに急に歩いてる俺の襟を後ろから引つ張つてくれちゃつてるの？思わず「つぐえ！」とか言つちやつただろ！ほらみる廊下にいる人みんなこつちを怪訝な顔して見てるじゃん！「なにあの人、キモいんですけど。」みたいな目で。ぼつちは目立つのを一番嫌うんだよ？そして、メンタル弱いんだからね！？すぐこの場から逃げ出すまである。

「なにキモい声だしてるんですか？せんばい。さつきから呼んでるんですけど。」

「つたく、いきなり後ろからひつぱるんじゃないやねえよ。息止まりかけただろうが。」

「えー、せんばいが悪いんですよ？わたしが呼んでるのに無視して行こうとするんです

から！」

そう言つて頬を膨らませ怒るこいつ、一色いろはは俺が生徒会長にしたことが縁となり、かなりの頻度で俺に仕事の手伝いを要求してくる1年の後輩だ。かなり秀でた容姿もあつて、学校では知らない人がいないほどの有名人で、ぼつちの俺からしたらこんな目立つ廊下で堂々と話しかけるのは遠慮いただきたい。ていうか、あいかわらずあざといからね？かわいいいけど。∴かわいいんかい。

「はいはい、あざといあざとい。それで俺になんのようなようだ？」

「あざとくないですよ！そんなですよ、また結構な量の仕事が出来てしまひまして、わたしひとりじゃ厳しいんで、せんぱいに手伝つてもらおうかと！」

そう言つて今度は敬礼のポーズ。ほんと、いまならまだしも昔の俺なら勘違いした上、軽く惚れて告白して見事玉碎してるところだぞ。

あ、ふられるんだ。

「はあ、わかつたよ。いまから生徒会室でいいのか？」

「はい！それでは鍵とつてくるんで、せんぱいは先に行つててくださいい！」

一一一

奉仕部にこの旨を伝え生徒会室へと向かうが雪ノ下には「サボリ谷くん？あなた最

近多くないかしら？」と氷点下の視線を浴びせられるわ、由比ヶ浜には「ヒツキー、いろはちゃんとかふたりの仕事でニヤニヤしてるんでしょ！キモい！」とかありもしないこと言われるわで大変な目にあつたぞ。

一色も本来なら俺が絶対に近づかないタイプのリア充代表のようなやつなのだが、小町に鍛えられたせいかなんか年下に対してはお兄ちゃんスキル使ってしまうんだよな。そのせいであいつ俺に面倒ごとばっか押し付けてくるようになったし。

「せんばい、お待たせしました！それでは入りましょうか。」

そして、面倒ごととの巣窟へと踏み出した（RPG風）

俺と昼休み。

昼休み。

俺はいつものごとくマイベストプレイスにて絶賛昼食中だ。今日は俺はかなり機嫌が良い。なんとたつて、今日の昼食は小町が愛妻ならぬ愛妹弁当を作ってくれたからな！受けとるとき小町が「まあ、小町の余り物だから気にしないで」とか言っていた気がするが、まあ気のせいだろう。…そこ！可哀想な目でみるんじゃない。俺が愛妹弁当といたらそれはそうなんだからね！

…とにかくだ。小町の作った弁当、ベストプレイスののどかな雰囲気、そしてこのひとり静かな空間。この俺得三大要因が揃ったからには上機嫌にもなる。このままチャイムがなるまでひとりでゆつたりと過ごしたい。

……あれ？これフラグじゃね？

「せんばーい、やっと見つけましたよ。」

やだ八幡いつのまに1級フラグ建築士になったのかしら。自分の溢れんばかりの才能が怖い!

「なんのようだ? 一色。俺はいまこのひとりである時間を噛み締めるのに忙しいんだが。それともなんだ、俺とご飯でも一緒にしに来たか?」

「な、な、なんですか、なんなんですか。わたしと一緒にご飯たべさせてやるから毎日お弁当つくつとこいつっていうことですか? めんなさいたしかにふたりで昼食も手作り弁当もかなり魅力的かなとは思いますがまだまだ順をおつていきたいのでごめんなさい。」

…もはやはやすぎてごめんなさいしかわからん。毎回毎回振られてるしもう何回目なんだ? 同じ女子に何度も振られるやつとかそうそういんのか? …もしかしてかなりレアなモンスターかなんかじゃないのん? みんなしてGOしてGETしてくるんじゃないのん?

「じゃなくて!! 今日ではせんぱいにお願いがあつてきました。」

「え、いやだけど。どうせ生徒会関連の仕事だろ?」

「や、今日は違うくて。せんぱい今日は奉仕部お休みですよね? だからせんぱい、わたしと放課後デートしてくださいっ。」

…は?

いや、そもそもなんで一色が今日部活がないと知っている？たしかに雪ノ下が朝、今日は家の用があつて参加できないから今日は奉仕部は休みとします。とかいって、休みになったんだが、せっかく休みになったのになんでわざわざ出掛けないといけないんだ。今日はたまったプリキュア見るのに忙しいんだぞ。それになにより、

「なんで、俺とお前がデートしないといけないんだ？そもそも誘う相手が違うだろ。」

「それはですね、葉山先輩とデートするにしても、なんにも下準備なしでは勝算が薄いと言うか、なんというかで。だったらせんぱいに練習台になつてもらえばいいじゃん！つてことになりまして。こんなでもせんぱいも一応男子高校生なんで少しは参考になるかなーと。」

「練習台つてなんだよ。それこそ俺はそのへんのリア充高校生の行くところなんてそもそも知らんし、めんどくさいからパスだ。悪いけど他を当たってくれ。」

一色のやつほんとに俺が参考になると思ったのか？俺なんて前、葉山や折本と出掛けたときご飯をサイゼと答えて折本にさんざんばかにされたことあるんだぞ。こりゃ、自慢にはならんが。

「そこをなんとかお願いしますよ。…本物を手に入れるためなんです。」

ぐつ。こいつ、あのときのことまだ覚えてやがったのか。俺の消し去りたい過去ワーస్తు3に入る例のあれを。だか、この八幡、こんなことで簡単に揺らいでしまうような

豆腐メンタルな男ではないのだ！ここはピシッとやってやる。
「くっ、仕方ねえな。」

…揺らいじやうのかよ。

俺と放課後。

まったく、一色のやつ約束取り付けるだけ取り付けて、どこに行けばいいとか全く決まらずにどっか行つちまつて。これはあれか？「あつ、ほんとにデートつて思つてたんですかー？冗談ですよ、冗談。」つてやつか？そうに違いない。そうと決まれば、帰つて良いんじゃない？

一一一

…そう思つてた時期が俺にもありました。けどあいつ駐輪場で待つてんだよ。これは完全に逃げ場ないやつじゃん。しかも、なんか髪の毛弄つたり、やけにそわそわしてるし。はあ、仕方ない、これ俺が声かけるしかないやつか。

「うっす。」

「せんぱい、おそいな…。来ないのかな？」

…あれ？俺、声かけたよね？もしかして、あれか？ぼっち拗らせ過ぎて、他の人に存在感知されなくなったとかか？バリアフィールド的な？やべー、厨二くせえ。

「おい、一色。」

「…へ？…ふえ？」

「いや、いちいち言い直さなくていいから、あざといし。」

「せ、せ、せんぱい?!いきなり声かけるなんてあれですか、カップルの「だーれだ」ってキヤハハウフフする展開に遠回しに持ち込もうとしますか?そりや多少憧れはありますけどここじや人の目もありますしするならふたりきりになったところでしたくださいごめんなさい。…はあはあ。」

「ここでも振られちゃうのかよ。てかもはや早すぎて9割方なにいってるかわかんないし、息上がるくらいならそんな早口で捲し立てなくてもいいだろ。」

「悪かったな、いきなり声かけて。じゃーな。」

「ちよちよちよ、待つてくくださいよ!なにどさくさに紛れて帰ろうとしてるんですか?約束忘れたなんて言わないですよね!」

「チツ。気づかれたか。」

「ていうか、せんぱい遅いですよー。こんなかわいい後輩を待たせるなんて、とんだご身分ですね!」

「かわいいとか自分で言っちゃうのかよ…。あとその頬膨らますやつ、あざとい以外の何者でもないからね?」

「そりやすまんかったな。で?いまからなにするんだ?」

「そーですよー…とりあえず買物に付き合ってもらいますっ!」

「いや、一応このデ、デートの目的は俺が行きそうなどこを参考にして葉山との本番に生かすとかじゃなかったのかよ。それじゃ思いつきりお前が行きたいとこじゃねえか。」

「えー、細かいことはいいいじゃないですか。それにせつかくせんばいがあるんですし？荷物持：男の人の好みとか聞けるじゃないですかー？」

いや、今完全に荷物持ちついていいかけたよね？あと、絶対に葉山のデートの下準備としてなら俺の服の好みとか意味ないじゃないですかやだー。自慢じゃないが、俺の服の冴えなさときたら親に悲しい目で見られるレベルである。外面を気にするときは大体小町に服装のチェック頼んでるしな。わが妹ながら小町のセンスは全くもってすばらしいな。うん。

「とにかく！時間ももったいないですし、さっそく行きましょうつ。ほらほら、せんばいはやくー！」

「ちよ、おい！押すんじゃねえよ！」

この端から見たらリア充爆発しろと言わんばかりの場面を目撃していた生徒は同じく現場を目撃していた国語教師から放たれる殺気によりしばらくその場を動けなかったそうだ。

「チツ。リア充が、滅べばいいのに。」

俺とデート。

い、一色のやつ……。なにが先輩に服の好みとか聞けるじゃないですか、だよ。無理矢理引きずり込まれたショッピングモールに着くや、やってきたのはここ、女性服売り場。…おもいつきり自分で服見る気満々じゃないですかやだ。現に着いてから一言も話してこないし。

「おい、一色。」

「あ、せんばい。いたんですか？」

ぐはつ。…もう帰ろうかな。なんで無理矢理つれてこられた上でメンタルへし折られないといけねえんだよ。八幡ほんと泣くぞ？いいんだな？…けど待てよ？この状況なら…!!

「ああ、なら最初から俺はいなかった。じゃ、そういうことで。」

「うそです！冗談じゃないですか。なにどさくさに紛れて帰ろうとしてるんですか！」

「チツ、だめか。」

「舌打ち!?それよりせんばい!せんばいはこのニツト、白と黒ならどつちがいいですか?」

まさか、これはギャルゲーにありがちな今後の展開に関わる重大な選択肢?清純な白か、小悪魔的な黒か。俺はこんな選択肢迷う余地もないな。うん。

「あー、どつちも似合うんじゃない?うん。」

これだよねっ☆

「はあ、これだからせんばいは…。こういうときはちゃんと選ばないとだめなんですからねっ!常識ですよ、常・識!」

「はっ。俺は常識なんてものさしでははかりきれねえんだよ。」

やだ、八幡。どこぞの厨二っぽい!

「そういうのいいですから。どつちですか?」

「つたく。…白のがいいんじゃないか。知らんけど。」

「ふふっ、それでいいんですよ。じゃあちよつと買ってきてますんで待つててください!」

というとはたばたとレジまでかけてく一色。いや、たしかに俺は白といたがあんな即決でいいのか?やっぱ女つてよくわからんな。…まあ、悪い気はしないが。

とはいえ、女性服売り場に一人で待つとくのはやはりぼつちの俺からしたらツライも

のがあるので売り場の外で待つとくとするか。

一一一一

「あれ？ヒツキー…?？」

ん？ヒツキーって聞こえた気がするが、まあ気のせいなんじゃないかな、うん。

「やっぱ、ヒツキーだ！おーい！」

やっぱ気のせいじゃなかったらしい。この声でヒツキーってことはあいつか。

「なんだ由比ヶ浜か。どうかしたのか？」

「どうしたのかって、こっちのセリフだよ！ヒツキーがここにいてなんて。なんでここに？！買い物?!」

「あー、それはだな、」

んー、どうするべきか。ここで一色と来てるなんて言ったら絶対由比ヶ浜のことだ、ヒツキーキモい！とかいって面倒なことになるだろうしな。ここはみんなのために心を鬼にして優しい嘘でもつくとしよう(ゲス顔)

「小町にちよつと頼まれ「せんぱーいっ、お待たせしました!」……。」

なんでやねん…。

「いろはちゃん!?!どうしてヒツキーといえるの!?!」

「結衣先輩こそ! :はつ、まさかせんばいこれがダブルブッキングってやつですか!」
くそう、やつぱ面倒なことになりやがった。つたく、どうすつかなあ。

一一一

「ちげーよ、由比ヶ浜とは今たまたま会つただけだ。」

「ところでヒツキーといろはちゃんはなにしてたの? 一緒に。」

「あー、あれです! せんばいには生徒会の備品の買い出しに付き合ってもらつて! ほら、せんばいって荷物持ち得意じゃないですか。」

おれ、いつから特技荷物持ちになつたんだよ :。さすがに無理があるだろその言い訳は。土壇場に弱いつてそんなんで大丈夫かよ、生徒会長。

「そうなんだ! ならさ、あたしももう用事終わつたし、一緒に行つてもいい?」

「 :まあ別にいいんじゃないやねえか。なあ一色。」

そういつて一色の方を見ると、どこかなしい表情で「そうですね。」と言う。なんだよ、急にそんな顔しやがつて。調子狂うじゃねえか。そんな顔されても俺はなんもできないぞ。

「いや、やつぱ悪い。こないだ生徒会の手伝いで俺、少しやらかしちまつてな、その埋め合わせも兼ねてんだ。さすがにそれに由比ヶ浜巻き込む訳にはいかねえし、また今度

な。」

「そっかー、それなら仕方ないね。じゃあ、あたしはもう行くね！バイバイ、ヒッキー、いろはちゃん！」

「おう。」

そういうとばたばたと帰っていく由比ヶ浜。それを横目に一色はというと、相変わらずさつきまでの元気はなく、どこか遠慮がちに俺の名前を呼ぶ。

「せんばい…。」

「まあ、あれだ。俺だつて一色に加えてこれ以上のやつ面倒見るのは勘弁だからな。別にそんな遠慮すんな。」

くそつ。慣れないことを言ったせいかな少し顔が暑いじゃねえか。

「ぶつ。やつばせんばいはせんばいですね。そこはお前と二人でデートしたかったでいいじゃないですかっ。」

「うるせ。つたく、さつきと次行くぞ！」

「はーいっ！」

そういつて笑顔で後ろを着いてくる一色を見て、なんだか少しだけ俺も頬が緩んだよ
うな気がした。

俺と帰り道。

「暗くなってきましたしそろそろ帰りましょうか。」

お、なんだもうそんな時間か。いやいや、なんだかんだ楽しんで時間経つのを忘れてたとかそんなんじゃないんだからね!? 違うったら違うよ?。

「おう、そうだな。」

あその後、すっかり元気を取り戻した一色にカラオケ、そしてひとりで入るのには躊躇いが起こるようなお洒落なカフェに連れられたが、さすがに休日出勤の俺を酷使しすぎじゃないですかね?。

案の定、あいつの買った荷物は俺が持つことになるわ、カラオケでは全然しらない曲のデュエットを強要するわ、極めつけは俺がプリキュアを歌ったときのあの目線……。いかん、思い出したら涙がでちゃうぜ☆

「せんばいったら、今日のデートはダメダメでしたね。」

「おいおい、あんだだけ俺を酷使しといてそれはないんじゃないですか?。」

「だってせんばい、カラオケに着いた途端に「じゃあ俺は適当に時間潰すから後で合流

な。」とか言い出しますしー。さすがにあれはないですよーっ。」

まあ、それは否定できんな。

「まあ、それは否定できんが。」

あ、声に出てた☆

「自覚はあるんですね…。まあでも！なんだかんだ色々付き合ってくれましたし、けっこう楽しかったので1回目はギリギリ及第点あげますっ！」

「そうですか、ありがとよ。ただ1回目って…。これ、次もあんのかよ。葉山相手にやれよ。」

「なんで不満げなんですかつ！今回のじゃまだまだ葉山先輩相手には出来ませんよ。なので…」

次もよろしくお願いしますね…。？」

そう耳元で囁く一色。

「っ!!いや、あ、わかったよ。」

やめて?!いきなり耳元なんて、びつくりして声にならん声が出ちまつたじゃねえか。そういうところがあざとかかわいいって言われんだよ。…かわいいんじゃねえか。まったく心臓に悪い…。

「ふふっ。じゃあせんぱい、また学校で！」

「おう。気を付けて帰れよ。」

そういうと敬礼し、ぱたぱたと足早に帰っていく一色。それを見送り、姿が見えなくなったのを確認すると俺も帰り道へと足を進める。あ、あいつに言いそびれちゃった前、こういうことはちゃんとと言わないとつて小町に怒られちゃったからな。ま、あとで連絡しとくか。

一一一

「たでーまー。」

「あつ、お兄ちゃんおかえりー。ねえねえ、どだった？いろはさんとのデートは？」

「あ？別にふつーだよ。心配すんな、俺はいつだつて小町一筋だぞ。」

ふつ、決まったな。小町の言葉を借りるなら、今の八幡的にポイントかなり高いんじゃないか？これは小町も涙なしではいられないはず…

「うえー。ごみいちゃん…さすがにそこまでいくと気持ち悪いよ？」

「ひでえ…。ちよつと着替えてくるわー。」

「はいはい。」

そういつて部屋にいくと、ささつと家着に着替えてと。あ、忘れねえ内に一色にメールしとくか。

カチカチ、ポチポチ、ピツ。

うし、これでよしと。さーて風呂でも入ってくるか。今日は疲れたし、さつさと寝るとしよう。

…ん？なんだあの袋。…つてあいつの買い物した荷物持って帰ってきちまった。はあ、しょうがない。明日にでも学校で渡せばいいか。

一一一

【比企谷八幡】

ちゃんと帰れたか？

今日はなんだ、俺も思ってたより楽しめたわ。

それだけだ、じゃあな。